

隨泉寺寺報

平成 20 年 (2008 年) 10 月号 第 458 号

082-892-0217 <http://www.zuisenji.com/>

浄土真宗本願寺派 高峯山隨泉寺

秋季永代經法要

講師 実相寺住職 相 唯信師

講題 『信心獲得について』

『お慈悲は 飯が三度三度 うまい時に
きかしてもらわにゃ』 源左同行

年を取ってから、お寺参りすればよいのでしょうか。「今が臨終」、最初で最後の今を生かされております。仏法は、“今”この身を生きる拠り所となる教えです。仏法によって自分の足下を知らされ、いかにこの人生を生きるかが明らかになるには、平素から聞いていないと間に合わないのです。

年をとってからは足は痛くなるし、耳も遠くなります。目は薄くなるし、眠たくもなりません。老少不定です。蓮如上人も『仏法は若きときにたしなめ』と仰せられています。

10 月の法座予定

10月12日.....掃除 井原

10月14日昼席午後1時より.....秋季永代經法要

10月14日夜席午後7時より.....出張法座 井原集会所

10月15日朝席午前10時より.....若い婦人の集い おとき

10月15日昼席午後1時より.....秋季永代經法要

11月 2日午後6時より.....門信徒会本部役員会

11月19日昼席午後1時より.....伝道院特別法座(実習)

研修旅行

9月30日(火)に研修旅行に行きました。

今年も研修旅行に参りました。最初の目的地鳥根県の赤名の西蔵寺には9時半頃着きました。山門の前で住職さんと坊守さんが待っていてくださいました。境内は苔むして歴史のある風情をかもし出していました。源哲勝和上は住職の先生の先生です。子供の頃に名前だけ聞いており感慨深いものがありました。



次

の目的地福泉坊は出雲の山の中にあるお寺です。とても素晴らしいお寺でした。庭もいいし、山門から参道にかけての景色がとても雰囲気よくてこころ洗われるようでした。

風穴も珍しく、とても涼しいものです。湧き水も冷たいおいしい水が出ていて、ペットボトルにいただいて帰りました。



最後の目的地洞光寺は禅宗の名刹でした。はじめて禅宗のお勤めにあいましたがなかなか素晴らしいものです。本堂の前の廊下についてある喚鐘を見たらとても懐かしい思いがしました。この鐘のおかげで尊いご縁を結ばせていただきました。

とても有意義な楽しい研修旅行でした。

灯茶会を開催しました。



今年も9月23日午後7時半から灯茶会を開催しました。裏山の竹を切って100本以上の灯籠を作ってもらいました。それを山門の石段に並べて、境内にも去年の竹の灯籠やガラスの明かりをつけました。裏の庭には今年



は新しい水を張った入れ物にろうそくをつけて、本当にすばらしく幻想的でした。虫の声も今年は特別大きな声で鳴いているように聞こえました。しかし参加者が少ないのが残念です。

今年はスタッフを含めて38名でした。来年は50名を超えることを期待しています。

☆御礼

永代經懇志	金 貳拾萬円	原 康彦殿	故 原 敏雄様	特別永代經志として
永代經懇志	金 拾萬円	吉岡 章殿	故 吉岡 ナミコ様	特別永代經志として
永代經懇志	金 拾萬円	山下 正行殿	田宮家	特別永代經志として

御礼

門信徒会へ	金 一封	原 康彦殿	故 原 敏雄様	香典返しとして
門信徒会へ	金 一封	原 康彦殿	故 西川 貢様	香典返しとして

は大きく×は小さく 励まされて元気がでるのです

学期末になって、子どもたちが成績通信簿をもらう頃になると、いつも思い出される作文があります。

小学四年女

《「おかあちゃん、ほら、つうしんぼもろてきた」といってわたすと、おかあちゃんはうけとって、だまって見ていられました。ほめてもらえるかと思っているのに、何もいわれません。それで「おかあちゃん、はやくなんとかいうて」とするとおかあちゃんは「たいしたことはない」わたしは、ほめてもらえるかと思って走って帰ったのに、がっかりしてしまいました。》

小学五年男

《通信簿をもらってみると『4』が二つもついていた。ぼくは大急ぎで帰った。お父さんは庭先で牛のせなかをかいていた。「お父ちゃん、これみい、通信簿もらったぜ」といって、お父さんは牛のせなかをかきながら「あっちにおいとけ、あとでみる」といった。ぼくはつまらぬので「ふーん」といって家の中へはいっていった。夕はんのときお父さんのおぜんの上においといた。お父さんは見ていたが「なんじゃあ『3』が四つもあるじゃないか」といった。ぼくは、『4』が二つもあるのにと考えた。》

子どもたちは、がんばりを認めてもらいたがっているのです。いいところ、を見てもらいたがっているのです。でも、お父さんもお母さんも、いいところ、はなかなか見えないらしいのです。問題点、×は見えずぎるくらい見えるらしいのですが、やはり期待過剰ということでしょうか。

そこで私は、先生方に「子どもに をつけてやるときには、誰にでもすぐ目につくように、心をこめて、鮮かな大きいのをつけてやってください。×は、虫めがねで見なければ見えないくらいのでいいのですよ」とおねがいしてきました。そして親ごさんがたには、「 を見てやりましょう。 が見つかったらうんと励ましてやってください」とおねがいしてきました。



小学四年男

《おとうさんは、じいっと見ていたが「うんまあこれならよかるう、お父さんの四年のときより上とうじや」といってくれました。ぼくはほっとして、これからはまい日、べんきょうをわすれないようにするぞ、とけっしんしました。》

このお父さんのような調子で、励ましてもらえば元気がでるのです。やる気が育っていくのです。

初盆を迎えるに当たって 母に寄せる思い

森川茂子

最愛なる母が亡くなって、早や3ヶ月が過ぎようとしています。寒い冬も乗り越え、陽差しやわらかな春も、満開の桜の花を見る事ができ、母の79歳の生涯は、安らかに幕を閉じることが許されましたこと、淋しさはたとえ様のない程、時が思い出を運んでくる度毎に、どっと胸に押し寄せて参ります。



けれど、孫ひ孫達に囲まれながらの楽しい日々、詩や俳句に心を託し、ノートに手帳にと、いつも書いていた母、あれもこれもと、振り返っては、いろいろ思い出して涙が溢れて参りますが、倅せの中に毎日過ごす事が出来た母を思いますと、感謝でいっぱいでございます。

生前より信仰心が厚く、人には熱く愛をもって接し、情け深く、常々母が言っていた事は『全ての原因は自分にあり』『喜ばば喜び事が来る』と、そんな母の笑顔は格別で、私には到底真似の出来ないあの笑顔、苦しみも悲しみもあつたはずなのに・・・。

母が亡くなって更に、母という存在の大きさと、限りも知らない大愛がふつつつと湧いて参ります。この頃、よく思うことがあります。

人は亡くなったその後に、何か残せるだろうか ... 母にそれを思います時、一生懸命“命”を生きていた姿、それを見てきた私は、後ろ姿にも無言のうちに多くを教えられました。“忘れ得ずして思い出さず”の諺がありますが、私の心の中に、いや全てに母の愛が浸みわたり、これこそが母の残してくれた一番の財産、となりました。

それが‘今を生きる力’感謝の出発点’ともなって、私に語りかけ、今そして今からも尚、燦と輝き、引き継いで行きたいと思つて止みません。『ありがとう、お母さん・・・』

八月、もうすぐお盆をお迎えするこの月は、あの世この世は一如であるが如く、この現世(うつしよ)に身を置いている我々子孫は、幽世(かくりよ)に居られる先祖さんを哀しませる事のない様お誓いし、又見守っていて下さい、と共に心を通わせ、懇ろなる供養をさせて戴きたいと心より思わずにはおれません。

